



呂不韋の一字千金 (史記の中の千金①)

5月①のごあいさつ
山内公認会計士事務所
2022年5月1日(日)

呂不韋は陽翟(江南省)の大商人である。

あちこち行き来して、安く買い取り、高く売りさばき、**千金の富**を蓄えた。商用で趙の都「邯鄲」に出かけ、秦からの人質「子楚」と出会い、彼に資金的な援助と秦の皇太子になる策を授け、実行した。「子楚」は「**秦国の王**」となり、その子の「政」は「**秦の始皇帝**」となって、中国を統一した。

功績により呂不韋自身も秦の宰相となった。

文信侯に封ぜられ、河南で十万所の所領を得て、「仲父」と号せられ、秦では並ぶ者のない権力者となった。

呂不韋の家の下僕は一万人もいた。

この当時、魏には信陵君、楚には春申君、趙には平原君、齊には孟嘗君がおり、いずれも士を尊重し、客を集めて競いあっていた。(各国の宰相クラス)

呂不韋も士を招き集め、**食客は三千人**に達した。

当時は、諸侯の下に身を寄せる論客が多く、荀子のごとく、著わした書が天下にあまねく広がる者もいた。

そこで、呂不韋は、自分のところの客人たちにそれぞれ学び伝えていることを記させ、八覽、六論、十二紀に分ち、「呂氏春秋」と名付けた。

完成した「呂氏春秋」を秦の都「咸陽」の市場の入口の並べ、その上に千金を吊り下げて、諸国の学者、論客たちを招き寄せ、「一字でも増やしたり、削ったりできる者には千金を与えよう」と触れを出した。

呂不韋が編纂したという「呂氏春秋」は全 26 巻は、二十余万語からなる。

「十二紀」の終りの「序意篇」によると、人々をして自然の大道を知って、人倫実践の規範を悟らしめようとしている。孔子が編纂したという「春秋」にならって呂不韋が当時の学者を集めて作成させたものである。そのため全体として統一されたものではなく、儒家、道家、法家、兵家、陰陽家等の諸説が混在しているが、古代史の研究上貴重な文献とされている。

呂不韋彼自身は道家や陰陽五行家に傾倒しており、秦の政治は、李斯が登場するまでは、法家的立場をとっていなかったと考えられる。

呂不韋は、趙の人質となっている秦の公子を「邯鄲」でたまたま目にして「これ奇貨なり、居くべし」とその将来に投資した。

商業、投機、政治、思想のトップレベルを経験し、諸国での名声も高かった。

それだけに「一字千金」という後世の話題ともなる故事を残したのだ。

参照：史記(呂不韋列伝)、司馬遷史記(徳間書店)